

# 大学生の学習動機と Big Five 性格の関連性

小野 洋平

The relationship between learning motives and big-five personality in university students  
Yohei Ono (Department of Psychology, Komazawa University, Japan)

## 抄録

本研究では、学習動機と Big Five 性格の関連性について検討した。大学生 296 名に学習動機に関する質問紙および NEO-FFI を実施した。重回帰分析の結果、内容関与的動機と開放性、誠実性の間に正の回帰係数が得られた。一方、内容分離的動機と神経症傾向、外向性の間に正の回帰係数が、開放性の間に負の回帰係数が得られた。このことから、性格特性と学習動機との関連が示唆された。開放性は内容関与的動機、内容分離的動機の双方に関与していることから、開放性が反映する知的好奇心を高める講義の必要性が示唆された。

キーワード: 学習動機・Big Five・重回帰分析・大学生

## 問 題

文部科学省 (2020) の学校基本調査によれば、大学・短大の進学率は 58.6% に上っている。進学率は年々増加傾向にあり、Trow (1973) の基準に基づくと、大学は一部の者が学ぶエリート段階から、多種多様な学生が学ぶユニバーサル段階に突入しているといえる。

様々な学生が大学に進学しているが、進学目的も年を重ねて変化している。進研アド (2014) が行った調査によれば、2008 年の調査と比較して学歴志向の目的は大差がないものの、幅広い教養を身につける、専門的な知識習得を目指すといった高等教育を受ける目的が低下していることを指摘している。一方で、社会に出る前のモラトリアムとしてや、なんとなくといった無目的の進学理由も増えている。また、中村・薊 (2017) は学校適応に影響を及ぼす要因として大学入学動機を取り上げ、これにまつわる質問紙を作成した。その結果、自由・享楽、知名度・評判、学問的探究など、9 つの因子が抽出されている。これらの結果は、大学生が大学で学ぼうとする理由が多種多様であることを示している。

学士教育に求められる課題の一つは、生涯自律的に学び続ける学習者を育てることであり (文部科学省, 2008; 畑野, 2010)、自律的な学習の重要な要因として学習動機が挙げられる (山地, 1991, 市川, 1998; 市川・堀野・久保, 1998, 藤田・富

田, 2012)。学習動機とは、学習行動を選択する時の理由 (浅野, 2006) であり、八木 (1996) は、学習動機が実際の学習行動や学習スタイルを規定する要因であることから、その構造や他の要因との関連を検討することの意義について述べている。

教育場面における動機づけに関して古くから検討されてきたのは、内発的動機づけと外発的動機づけである。内発的動機づけは学ぶこと自体が楽しく自発的に取り組む動機づけであり、外発的動機づけは報酬や他者からの働きかけなどによって学習が動機づけられる。一方、学習者の動機づけを内発的動機づけと外発的動機づけに二分するのではなく、複数の要因による影響を考慮したモデルも考えられている。Deci & Ryan (2000) の自己決定理論では、行動の自己決定性を取り入れ、外発的動機づけを自己決定性の程度により 4 つに細分化している。また、鹿毛 (2013) は、認知、感情、欲求、環境の 4 要因の相互作用により学習が動機づけられると述べている。

一方、市川 (1995) は、「何のために勉強するのか」に関する調査結果から、充実志向、訓練志向、実用志向、関係志向、自尊志向、報酬志向の 6 因子からなる学習動機の 2 要因尺度を作成している。充実志向は、学ぶこと自体が楽しいから、訓練志向は、知力を鍛えるため、実用志向は仕事や生活に活かすために学習が動機づけられる。これら 3 因子は、学習内容に直接関与する動機 (内容

関与的動機)である。次に、関係志向は他者につられて、自尊志向はプライドや競争心から、報酬志向は報酬を得る手段として学習が動機づけられる。これらは学習内容とは必ずしも直接関与するわけではない動機(内容分離的動機)である。このように学習内容を重視するか否かという学習内容の重要性の要因により6因子は2つに分類される。また、学習によって報酬が見込めるかどうかという学習の功利性の要因により、功利性の高い実用志向と報酬志向、功利性が中程度の訓練志向と自尊志向、功利性の低い充実志向と関係志向の3つに分類される。

有能感や自己効力感は、学習を動機づける重要な要因である(Deci & Ryan, 2000; 岡田, 2007)が、大学の講義でこれらを感じられる代表的な状況は試験や課題の成果であろう。関係志向や報酬志向といった内容分離的動機の高い場合には、試験成績が低下傾向にあり(平山・平山, 2001; 宮本, 2020)、学習動機は試験成績に影響を及ぼす要因と考えられる。また、小野(2020)は、訓練志向の高い者は課題先延ばしが少なく、自尊志向が高い者は課題先延ばしが多いことを報告している。さらに、Ryan & Connell(1989)は、学業上の失敗を次に活用するか、失敗を脅威ととらえるかに学習動機が関連することを示唆している。

以上のことから、自ら主体的に学ぶ学士を育成するうえで、学習者がどのような学習動機を持ち、学習動機がどのような要因に影響を受けるかを検討することは重要と考えられる。一方、学習行動を規定する要因として性格特性が挙げられるが(八木, 1996; O'Connor & Paunonen, 2007)、性格特性が学習動機に及ぼす影響については十分に検討されていない。Costa & McCrae(1992)は、BigFive性格特性のうち、開放性と誠実性が学業成績と関連することを指摘している。開放性は知的好奇心や創造性を反映し、誠実性は有能感や向上心、粘り強さを反映しており、これらは充実志向や訓練志向など、内容関与的動機づけと関連する特性であると予想される。そこで、本研究では市川(1995)の学習動機の2要因尺度とNEO-FFIを用いて、性格特性と学習動機の関連性について検討した。

## 方法

### 調査協力者

一般教養科目を受講する都内の大学生296名(女性182名、男性114名、平均年齢18.6歳、 $SD = 0.89$ 歳)に対して2019年6月中旬に調査を行った。

### 調査内容

**学習動機の2要因尺度** 学習動機については市川(1995)が作成した学習動機の2要因尺度を用いた。この尺度は学習内容に直接関連する内容関与的動機として、充実志向、実用志向、訓練志向の3因子(各6項目)、学習内容と直接的に関連しない内容分離的動機として、関係志向、自尊志向、報酬志向の3因子(各6項目)、計6因子(36項目)で構成される。調査では「勉強は何のためにするのか」に関する質問に「よくあてはまる」(5点)から「まったくあてはまらない」(1点)の5件法で回答するように教示した。

**NEO-FFI** 下仲・中里・権藤・高山(1999)の作成した日本語版60項目を用いた。この尺度は、神経症傾向、外向性、開放性、調和性、誠実性の5因子にそれぞれ12項目の質問があり、「非常にそうだ」(4点、逆転項目は0点)から「全くそうでない」(0点、逆転項目は4点)の5件法で回答を求めた。

**定期試験成績** 半期15回終了後の7月中旬に定期試験を実施した。問題内容は、穴埋め問題、選択問題、論述問題であり、問題の正誤をもとに100点満点で評価した。

## 結果

まず、それぞれの質問紙の回答を得点化した(Table 1)。次に、NEO-FFIの5因子得点を説明変数、学習動機の2要因尺度得点を目的変数とする重回帰分析を行った。また、学習者の学習動機は、いずれか1つに特徴づけられるのではなく、複数の学習動機を持ち(市川, 2008; 友納, 2018)、それらが同時に学習行動に関与する(岡田, 2010)ことから、6因子を内容関与的動機と内容分離的動機にまとめ、これらを目的変数とする重回帰分析も行った。

本研究では、IBM社製SPSS statistics(ver.25)を用いて分析を行い、重回帰分析の変数投入には

Table 1 質問紙の統計量

質問紙	因子名	平均値	標準偏差	95%信頼区間	最小値	最大値
NEO-FFI	神経症傾向	31.3	7.27	[ 30.4 - 32.1 ]	4	48
	外向性	25.9	7.13	[ 25.1 - 26.7 ]	8	44
	開放性	28.7	5.96	[ 28.0 - 29.4 ]	11	43
	協調性	30.3	5.66	[ 29.6 - 30.9 ]	12	44
	調和性	26.3	6.65	[ 25.6 - 27.1 ]	4	44
学習動機	充実志向	21.8	4.45	[ 21.3 - 22.4 ]	6	30
	訓練志向	19.4	4.74	[ 18.9 - 20.0 ]	6	30
	実用志向	22.7	4.40	[ 22.2 - 23.2 ]	6	30
	関係志向	16.0	4.99	[ 15.4 - 16.6 ]	6	28
	自尊志向	20.3	4.87	[ 19.7 - 20.8 ]	6	30
	報酬志向	18.5	4.25	[ 18.0 - 19.0 ]	6	30

ステップワイズ法を採用した。

### 内容関与的動機と NEO-FFI の関連性

充実志向得点と NEO-FFI 得点の重回帰分析の結果は有意であり ( $R^2=.17$ ,  $F(2, 293)=31.45$ ,  $p<.01$ ), 開放性 ( $\beta=.34$ ,  $p<.01$ ), 誠実性 ( $\beta=.23$ ,  $p<.01$ ) とともに正の回帰係数が得られた (Figure 1(1)参照)。

次に、訓練志向得点と NEO-FFI 得点の重回帰分析の結果は有意であり ( $R^2=.10$ ,  $F(3, 292)=12.30$ ,  $p<.01$ ), 開放性 ( $\beta=.23$ ,  $p<.01$ ), 誠実性 ( $\beta=.24$ ,  $p<.01$ ) に正の回帰係数が、調和性 ( $\beta=-.11$ ,  $p<.05$ ) に負の回帰係数が得られた (Figure 1(2)参照)。

また、実用志向得点と NEO-FFI 得点の重回帰分析の結果は有意であり ( $R^2=.06$ ,  $F(1, 294)=21.27$ ,  $p<.01$ ), 誠実性 ( $\beta=.26$ ,  $p<.01$ ) に正の回帰係数が得られた (Figure 1(3)参照)。

最後に、充実・訓練・実用志向得点の総和を内容関与的動機得点として、NEO-FFI 得点との重回帰分析を行った。その結果、有意な回帰式が得られ ( $R^2=.17$ ,  $F(2, 293)=27.82$ ,  $p<.01$ ), 開放性 ( $\beta=.26$ ,  $p<.01$ ), 誠実性 ( $\beta=.29$ ,  $p<.01$ ) とともに正の回帰係数が得られた (Figure 1(4)参照)。

### 内容分離的動機と NEO-FFI

関係志向得点と NEO-FFI 得点の重回帰分析の結果は有意であり ( $R^2=.10$ ,  $F(3, 292)=11.99$ ,  $p<.01$ ), 神経症傾向 ( $\beta=.25$ ,  $p<.01$ ), 外向性 ( $\beta=.24$ ,  $p<.01$ ) に正の回帰係数が、開放性 ( $\beta=-.15$ ,  $p<.01$ ) に負の回帰係数が得られた (Figure 1(5)参照)。

次に、自尊志向得点と NEO-FFI 得点の重回帰分析の結果は有意であり ( $R^2=.04$ ,  $F(2, 293)=6.90$ ,  $p<.01$ ), 神経症傾向 ( $\beta=.18$ ,  $p<.01$ ), 外向性 ( $\beta=.14$ ,  $p<.05$ ) とともに正の回帰係数が得られた (Figure 1(6)参照)。

また、報酬志向得点と NEO-FFI 得点の重回帰分析の結果は有意であり ( $R^2=.10$ ,  $F(3, 292)=12.30$ ,  $p<.01$ ), 神経症傾向 ( $\beta=.14$ ,  $p<.05$ ), 外向性 ( $\beta=.16$ ,  $p<.01$ ) に正の回帰係数が、開放性 ( $\beta=-.19$ ,  $p<.01$ ) に負の回帰係数が得られた (Figure 1(7)参照)。

最後に、関係・自尊・報酬志向得点の総和を内容分離的動機得点として、NEO-FFI 得点との重回帰分析を行った。その結果、有意な回帰式が得られ ( $R^2=.08$ ,  $F(3, 292)=9.60$ ,  $p<.01$ ), 神経症傾向 ( $\beta=.23$ ,  $p<.01$ ), 外向性 ( $\beta=.22$ ,  $p<.01$ ) に正の回帰係数が、開放性 ( $\beta=-.14$ ,  $p<.05$ ) に負の回帰係数が得られた (Figure 1(8)参照)。

### 試験成績と NEO-FFI, 学習動機との関連

講義の最後に行われた定期試験成績 (平均点 78.3 点,  $SD=9.62$ ) と NEO-FFI, 学習動機との関連性について検討した。重回帰分析の結果、NEO-FFI と定期試験成績の間に有意な回帰式は得られなかった (n.s.)。一方、学習動機と定期試験成績との間には、有意な回帰式が得られ ( $R^2=.05$ ,  $F(2, 268)=7.83$ ,  $p<.01$ ), 自尊志向に正の回帰係数が ( $\beta=.30$ ,  $p<.01$ ), 報酬志向に負の回帰係数が得られた ( $\beta=-.18$ ,  $p<.05$ ) (Figure 2 参照)。

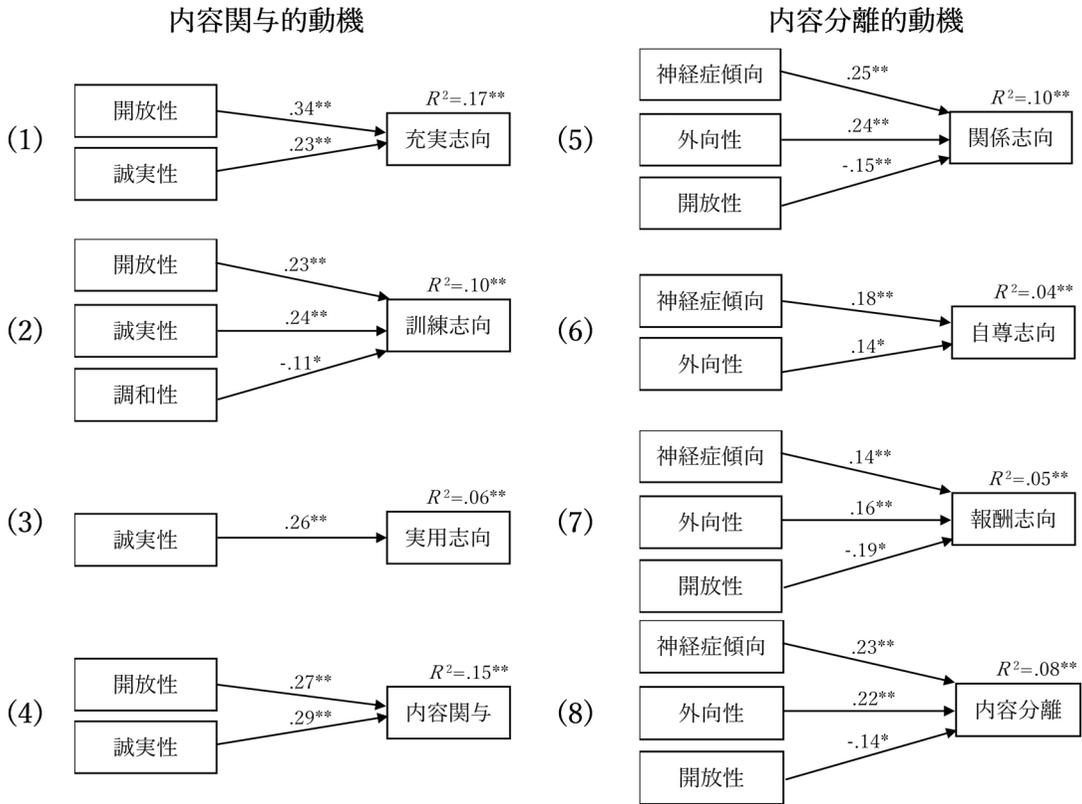


Figure 1. 学習動機の2要因尺度とNEO-FFIの重回帰分析結果

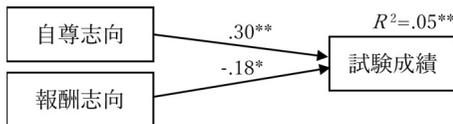


Figure 2. 学習動機と試験成績の重回帰分析結果

## 考察

### 内容関与的動機とNEO-FFIの関連性

本研究では、学習動機とBig Five性格特性との関連性について検討した。

まず、充実志向得点と開放性、誠実性との間に、有意な正の回帰係数が得られた。充実志向は、学ぶこと自体が楽しいから学ぶ学習動機である。一方、開放性は、想像性や知的好奇心の高さ、判断の独自性を示す特性である。また、誠実性は目標を持ち、達成への意志の強さや粘り強さを示す特性である。よって、知的好奇心が高く、自身の目標に向かって粘り強く学習する者は、学ぶこと自体が楽しいことが学習を動機づけていると考えら

れる。

次に、訓練志向と開放性、誠実性に正の回帰係数が、調和性に負の回帰係数が得られた。自己の成長のために学ぶことが訓練志向の学習動機であり、充実志向と同様に、知的好奇心を持ち、自身の目標に向かって粘り強く学習する者は自己成長に動機づけられた学びを行うと考えられる。一方、調和性に負の回帰係数が得られた理由は定かではなく、さらなる検討を行う必要があると考えられる。

実用志向に関しては、誠実性にのみ正の回帰係数が得られた。自身の目標に向かって粘り強く学ぶ者は、その目標に学習を関連付けて学んでいることがうかがえる。

内容関与的動機とBig Five性格の関連については、開放性と誠実性に正の回帰係数が得られた。開放性と誠実性は学習成果と関連することが示唆されており (McCrae, 1987; Digman & Takemoto-Chock, 1981)、学習動機に対してもこれらの特性が影響を及ぼすことが示唆された。

## 内容分離的動機と NEO-FF

関係志向得点と神経症傾向、外向性との間に有意な正の回帰係数が得られた。関係志向は友人が学ぶからそれに倣う、他者からの否定的評価を避け、肯定的評価を得るために学ぶなど、他者との関係性の中で学習が動機づけられるものである。神経症傾向は、恐怖や悲しみ、怒りなど、ネガティブな感情を感じやすい。そのため、他者からの否定的な評価を避けるために学習が動機づけられていると考えられる。また、外向性は社交性と関連することから、他者と交流しながら学ぶことが動機づけられると考えられる。一方、関係志向と開放性との間には負の回帰係数が得られた。これは開放性をもつ判断の独自性が関連していると思われる。すなわち、開放性が高い者は、他者の影響を受けて学習行動が選択されるのではなく、自身の判断によって学習行動が選択されていると推察される。

次に、自尊志向と神経症傾向、外向性に正の回帰係数が得られた。自尊志向は、自尊心の維持・向上によって学習が動機づけられる。自尊感情と外向性には正の相関が、神経症傾向には負の相関が認められることが示唆されており（塗師, 2005; Shikishima, Hiraishi, Takahashi, Yamagata, Yamaguchi, & Ando, 2018）、本研究において外向性と自尊志向に正の回帰係数が得られたことは、これらの知見を支持するものと考えられる。しかしながら、神経症傾向と自尊志向の間には、負の回帰係数ではなく、正の回帰係数が得られている。この理由は定かではないが、自尊志向は「勉強が人なみにできないのはくやしいから」や「勉強が人なみにできないと、自信がなくなってしまうので」など、学習行動の結果によって生じる感情的変化に関する質問によって得点化されている。よって、自尊志向はその人の持つ特性的な自尊感情を反映するものというよりかは、情緒の不安定さや敏感さによって、ネガティブ感情の予防、解消を志向する学習動機である可能性が考えられる。

報酬志向に関しては、神経症傾向、外向性との間に有意な正の回帰係数が得られた。報酬志向は、学習が金銭的報酬や、社会進出後の経済的利得など、外的な要因によって動機づけられる。ただし、報酬志向の質問項目には、「成績が良ければ、こづかいやほうびがもらえるから」といった利得

に関する項目と、「学歴がよくないと、おとなになっただけいい仕事先がないから」といった損失に関する項目が混在している。高橋・山形・木島・繁舩・大野・安藤（2007）は、BIS/BAS 尺度の妥当性を検討するために、神経症傾向、外向性得点との相関分析を行っている。その結果、外向性はBAS 尺度との間に正の相関が認められ、神経症傾向はBIS 尺度との間に正の相関が認められている。このことから本研究結果を解釈するならば、外向性は利得を得るため、神経症傾向は損失を回避するために学習行動が駆動されている可能性が考えられる。一方、報酬志向と開放性には負の回帰係数が得られている。関係志向と同様に、判断の独自性を反映する開放性が高い者は、外的報酬など、他者に依存するような学習動機を持ちにくいと考えられる。

内容分離的動機と Big Five 性格の関連については、神経症傾向と外向性に正の回帰係数が、開放性に負の回帰係数が得られた。内容分離的動機を取りまとめた場合においても、学習動機の低位尺度ごとに行った重回帰分析と同様に、神経症傾向、外向性、開放性との関連が認められたため、結果の解釈については上述の内容を参照されたい。

## 試験成績と NEO-FFI、学習動機との関連

学習動機に関しては、自尊志向に正の回帰係数が、報酬志向には負の回帰係数が得られた。平山・平山（2001）は学習動機と成績の関連性について、関係志向、報酬志向に負の相関が認められたことを報告している。また、宮本（2020）はテスト成績をもとに、上位者と下位者に分けて学習動機を比較した結果、下位者の関係志向得点が上位者よりも高くなっていた。平山・平山（2001）と宮本（2020）で指摘された関係志向や報酬志向は、内容分離的動機である。本研究においても有意な回帰係数が得られた自尊志向と報酬志向は内容分離的動機であり、大学での学習成果には内容分離的動機が関与すると考えられる。

また、報酬志向は外発的に学習が動機づけられることを示すため、学習に対して何らかの見返りが得られなければ、学習行動が生じにくいと考えられる。その結果として、成績との間に負の回帰係数が得られたと考えられる。一方、本研究では、自尊志向と試験成績には正の回帰係数が得られて

いる。外向性や神経症傾向が高い場合には、自尊心が高くなることから、上昇志向を持つ外向性の高さやネガティブな感情を抱きやすい神経症傾向の高さが、試験に対する学業的取り組みを高めた可能性が考えられる。

NEO-FFI 得点が定期試験成績に及ぼす影響については、必ずしも明確ではなかった。松田・佐藤・地頭・田中・田原・森 (2006) は、主要5因子性格検査(村上・村上,1997)の因子得点を説明変数、中間試験、期末試験を目的変数とする重回帰分析を行った結果、有意な回帰式は得られなかったことを報告している。また、O'Connor & Paunonen (2007) は Big Five 性格と学業成績の関連についてのメタ分析を行っているが、Big Five 性格特性自体よりも、それらの下次元の方が学業成績をより良く予測する因子であることを指摘している。本研究では Big Five 性格特性を NEO-FFI を用いて測定し、5 因子得点と学業成績の関連性を分析したことから、明確な関連性が示されなかった可能性が考えられる。

### 教育場面への応用可能性と本研究の課題

本研究の結果、Big Five 性格特性は学習動機と関連することが示唆された。特に開放性と学習動機、学習動機と試験成績の関係性から、知的好奇心を高める講義の工夫により、学習が動機づけられ、その結果として学習の理解度が向上する可能性が考えられる。ただし、Costa & McCrae (1992) は、開放性の高い者は既存の方法に縛られにくく、一般教養的教育に対して創造性を高められるかを教育上の問題点として挙げている。よって、知的好奇心を高めるのみならず、様々なアクティブラーニングを取り入れるなど、各講義で新たな取り組みを付加する工夫も必要と思われる。一方、学業成績に対しては、内容分離的動機の関連が示唆された。堀野・市川 (1997) は、能動的な学習を促進するには、学習内容の重要性が認識されるように動機づける必要性を示唆している。また、内容分離的動機が必ずしも学業成績の向上に寄与しないわけではなく、学習を始発させる動機である可能性も示唆している。Twenge, Zhang, & Im (2004) は、1960年と2002年で学習における内発的動機づけと外発的動機づけの違いを比較した結果、2002年の方が外発的に動機づけられて学習することを示唆している。内容関与的

動機は内発的動機に近く、内容分離的動機は外発的動機に近いと考えられるが、大学での学びが外発的動機によって行われる傾向があるとするならば、内容分離的動機の高い学習者に対して、学習が始発するような講義設計が必要であろう。また、報酬志向の高さが学業成績に負の効果をもたらしているが、報酬志向の質問項目には、物的な報酬と言語的報酬に関する内容が混在している。前者は内発的動機づけを低めるアンダーマイニング効果に、後者は内発的動機づけを高めるエンハンスング効果に影響を及ぼす要因と考えられている (Deci, & Ryan, 2002)。小野 (2019) は、報酬志向の項目には物的な報酬に関する質問が多く、内発的動機づけの低下や学習に対する好意的評価の低下に関連する可能性を示唆している。よって、リアクションペーパーなどにより、教員と受講生が双方向に意見交換し、教員によるフィードバックによる言語的な報酬を付加するような講義の工夫も求められる。

一方、性格特性が学習動機に影響を及ぼすことが示唆されたものの、本研究結果に示された重回帰分析の決定係数は必ずしも高くない。O'Connor & Paunonen (2007) が指摘したように、NEO-PI-R のような下位因子を持つ質問紙法を採用して、学習動機と BigFive 性格特性の関連について再検討することが求められる。

## 文 献

- 浅野志津子 (2006) 学習動機と学習の楽しさが生涯学習参加への積極性と持続性に及ぼす影響—放送大学学生の高齢者を中心に— 発達心理学研究, 17, 141-151.
- 中央教育審議会 (2008). 学士課程教育の構築に向けて 文部科学省 2008年12月24日 < [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/fieldfile/2008/12/26/1217067\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/fieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf) > (2023年1月12日)
- Deci, E. L., & Ryan, R. M.(Eds.)(2002). *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: University of Rochester Press.
- Digman, J. M., & Takemoto-Chock, N. K. (1981). Factors In The Natural Language Of Personality: Re-Analysis, Comparison, And Interpretation Of Six Major Studies. *Multivariate Behavioral Research*, 16(2), 149-170.
- 藤田 正,・富田翔子 (2012) 自己調整学習に及ぼす学

- 習動機および学習方略についての認知の影響 12, 81-87.
- 畑野 快 (2010). 自己調整学習の有効性と検討課題及び大学教育への導入についての一考察 京都大学高等教育研究, 16, 61-72.
- 平山祐一郎・平山祥子 (2001) 大学生における学習動機の2要因モデルの検討 東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学, 41, 101-105.
- 市川伸一 (1995). 学習と教育の心理学 岩波書店
- 市川 伸一 (2008). 学ぶ意欲の心理学 PHP 新書
- 鹿毛雅治 (2013). 学習意欲の理論—動機づけの教育心理学 金子書房
- 小山和子 (2015) 動機づけと自己効力感の変化が大学生の学習意欲に与える影響 多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要, 7, 63-74.
- 松田浩平・佐藤恵美・地頭沙織・田中翔子・田原理恵・森昇子 (2006) 学習への動機づけと試験成績の原因帰属が学業成績に及ぼす影響—学習能力と性格の関連性から— 文京学院大学人間学部研究紀要, 8 (1), 177-188.
- McCrae, R. R. (1987). Creativity, divergent thinking, and openness to experience. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52(6), 1258-1265.
- 宮本孝子 (2020) 学習動機の2要因モデルからみた教職課程学生の動機づけ—志向性の特徴と成績との関連— 城西大学教職課程センター紀要, 4, 47-51.
- 文部科学省 (2020) 令和2年度学校基本調査
- 村上宣寛・村上千恵子 (1997) 主要5因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究, 6(1), 29-39.
- 中村 真・薊 理津子 (2017) 大学適応に影響する要因としての入学動機に関する基礎的検討 江戸川大学紀要, 27, 301-308.
- 塗師 斌 (2005) 自尊感情と性格および感情の関係 横浜国立大学教育人間科学部紀要 1 教育科学, 7, 107-114.
- O'Connor, M. C., & Paunonen, S. V. (2007). Big Five personality predictors of post-secondary academic performance. *Personality and Individual Differences*, 43(5), 971-990.
- 岡田いずみ (2007). 学習方略の教授と学習意欲—高校生を対象とした英単語学習において— 教育心理学研究, 55, 287-299.
- 岡田 涼 (2010). 小学生から大学生における学修動機づけの構造的変化 教育心理学研究, 58, 414-425.
- 小野洋平 (2019) 現代大学生の学習動機と学習に対する態度 駒澤大学心理学論集, 21, 31-37.
- 小野洋平 (2020) 課題の先延ばし傾向に及ぼす学習動機の影響 日本体育大学紀要, 49, 1000-1008.
- Ryan, R. M., & Connell, J. P. (1989). Perceived locus of causality and internalization: Examining reasons for acting in two domains. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 749-761.
- Shikishima, C., Hiraishi, C., Takahashi, Y., Yamagata, S., Yamaguchi, S., & Ando, J. (2018) Genetic and environmental etiology of stability and changes in self-esteem linked to personality: A Japanese twin study. *Personality and Individual Differences*, 121, 140-146.
- 進研アド (2014) 【特別企画】なぜ、その大学に入学したのか—「大学受験振り返り調査」から、受験意識と学生生活充実度の深層に迫る—, *Between*, 254, 20-25.
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山 緑 (1999) 日本版 NEO-PI-R, NEO-FFI 使用マニュアル 東京心理株式会社
- 高橋雄介, 山形伸二, 木島伸彦, 繁榊算男, 大野 裕, 安藤寿康 (2007) Gray の気質モデル—BIS/BAS 尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討— パーソナリティ研究, 15(3), 276-289.
- 友納艶花 (2018) 学習動機づけの類型化と職業観に関する実証的研究, 九州女子大学紀要, 55(2), 71-84.
- Trow, M. (1973) *Problems in the Transition from Elite to Mass Higher Education*. Berkeley: Carnegie Commission on Higher Education.
- Twenge, J. M., Zhang, L., & Im, C. (2004). *It's Beyond My Control: A Cross-Temporal Meta-Analysis of Increasing Externality in Locus of Control, 1960-2002*. *Personality and Social Psychology Review*, 8 (3), 308-319.
- 八木成和 (1996) 大学生の学習観と性格特性との関連性 性格心理学研究, 4(1), 1-9.
- 山地弘起 (1991) 大学生の学習観に関する探索的研究 東京大学教育学部紀要, 31, 121-129.